

# 黒木西

黒木西小

学校だより

文責:校長 齋藤英義  
令和3年5月28日(金)

NO.04



例年より20日あまり早い梅雨入りとなり、昨日も大雨の予報が出されたので、子どもたちの登校を心配していましたが、大きな被害が出ることもなくホッとしております。

しかし、まだまだ大雨が心配されますので、今後も防災には細心の注意を払っていききたいと考えています。保護者の皆様のご理解ご協力をよろしくお願い申し上げます。



## アセスアンケート

逆に、「事例B」友だちがからかって「さすがだね」と皮肉を言っているのに、それを真に受けている児童の「**適応感**」は高くなるでしょう。また、前者「A」の場合、教師の観察では「問題なし」となるかもしれませんが、本人はSOSの状態にあるかもしれない。「**問題あり**」ですが、本人は苦痛を感じていません。



このように考えると、子どもを支援する際には、教師の観察や客観的なデータから得られる指標に加えて、「本人が感じているSOSの度合い」を十分に考慮する必要があります。人は膝ぐらいの深さと言います。危機とは、客観的であると見えます。危険とは、客観的な観点と主観的な観点を統合して理解すべきなのです。



### 生活「満足」と「満足感」

新年度が始まり、2ヶ月が過ぎようとしています。子どもたちも、私の姿を見ると「校長先生！」といろいろと話しかけてくれることが多くなってきました。子どもたちの話を聞いたり、遊んでいる姿を見たりしながら、(当たり前のことですが)子どもたちなりにそれぞれにいったい考えているんだなあとつくづく感じています。

そんな子どもたちの児童理解の一助として、学校環境適応尺度「アセス」というアンケートを活用しています。このアセスで測定しているのは、「**適応**」ではなく「**適応感**」です。どこの違うのかというと、客観的に見て「**適応**」することができているかどうかではなく、「本人がどれくらい**適応**している」と感じているかということです。ですので、「**適応感が低い**」という結果が出た場合は、わかりやすく言えば、本人が「**適応**」できていないみだれと感じている「**SOS (不安)**」を発信しているのと同じであると考えることが出来ます。



そう考えると、本人が感じている「**適応感**」は、「**適応**」と一致しないこともありえます。たとえば、「**事例A**」ある課題をもった児童に対して、友だちが善意でいろいろと世話を焼いたりアドバイスをしたりして



いても、本人がそれを「**自分をバカにしている**」と受け取っている場合、「**適応感**」は低くなります。

そこで本校では、「**適応感**」つまり**子どものSOSの度合い**を測り、教師の観察やその他のデータと照らし合わせることで、よりの確かな支援を構築していきたいとの思いからアセスを活用しています。

当然のことながら、「その他のデータ」の中には、保護者が気になられたこと等も含まれております。学校・家庭の連携で、**SOSの度合い**を自分で少なくしていくことができるとよいな子どもたちを育てていきたいと考えております。ご協力よろしくお願い申し上げます。

### 今年も見事な「菖蒲で勝負」

令和元年7月に、豊岡地区自治運営協議会の方々の連携のもと始まったと聞いております。本県におきましては、非常事態宣言のさらなる延長が決定した中ではあります。が、菖蒲はコロナ禍にも負けず、梅雨時の大雨にも負けず、咲かせております。咲かせた花々に見渡す菖蒲の花々に元気をもらいながら、子どもたちとともに6月も頑張ってください！ご支援よろしくお願いします。

